

昆虫のいる風景
三木 卓



昆虫のいる風景
三木 卓

新潮社



昆虫のいる風景

印刷 1978年7月15日 発行 1978年7月20日

著 者 三木 卓

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71・振替東京4-808

業務部 (03)266—5111／編集部 (03)266—5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 植木製本株式会社

定価1200円 ©1978, Taku Miki, Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

昆虫のいる風景 目次

晩夏のアゲハ	7
夜のシンジュサン	12
アブラゼミのいた庭	17
シロアリの結婚飛行	22
タマムシの小箱	27
イラガの屋敷	32
セスジツユムシの死	37
ヒメウラナミジャノメの客	42
アカアリの狩り	47
オハグロトンボの町で	52
不具の虫	57
カナブンの記憶	62
ギンボシヒョウモンの交尾	67
ジャノメチヨウの産卵	72

ベニカミキリの饗宴

ネコノミの襲撃

米につく虫

虫の危険

カの痕

トンボの時

雨のユウマグラエダシヤク

クマゼミ、そしてイトトンボ

ジョロウグモのトンネル

ガガンボのさびしさ

スズメガのからだ

夏、そして秋

秋、そして冬

あとがき

本文挿絵
装幀
久平
住山
和英
代三

昆虫のいる風景

「波」一九七六年二月号～一九七八年三月号

晩夏のアゲハ

少年期を戦後の静岡市ですごした。静岡の名産といえばお茶と蜜柑である。アゲハチョウが多いように思われるのは、幼虫の食草である蜜柑の木が多かったりカラタチの垣根などがあるせいかもしれない。

蝶のきらいなこともはない。わたしもマニア少年ではなくて深い知識もなかったけれども、蝶は好きだった。キチョウの雄の黄色は今でも見ていて飽きのこない、いい色だと思うし、シミチョウの可憐なとび方を見ていると晴れた午後のひとときをつい、うっかりとすごしてしまったりする。しかし宝物のように思われるのはやはりアゲハチョウの一族であった。

静岡に来る前は満州にいたが、蝶の早い記憶という、今思い出してみると、やはりアゲハとタテハ（多分アカタテハ）である。タテハの方は大連の路によくとまっていたと思う。アゲハは活潑に満鉄の煉瓦建ての中央試験場の屋根に沿って飛んでいた。わたしたちはマンシュウアゲハと呼んでいたが、今思い出して見ると日本のアゲハチョウと同じもののように思われる。それと

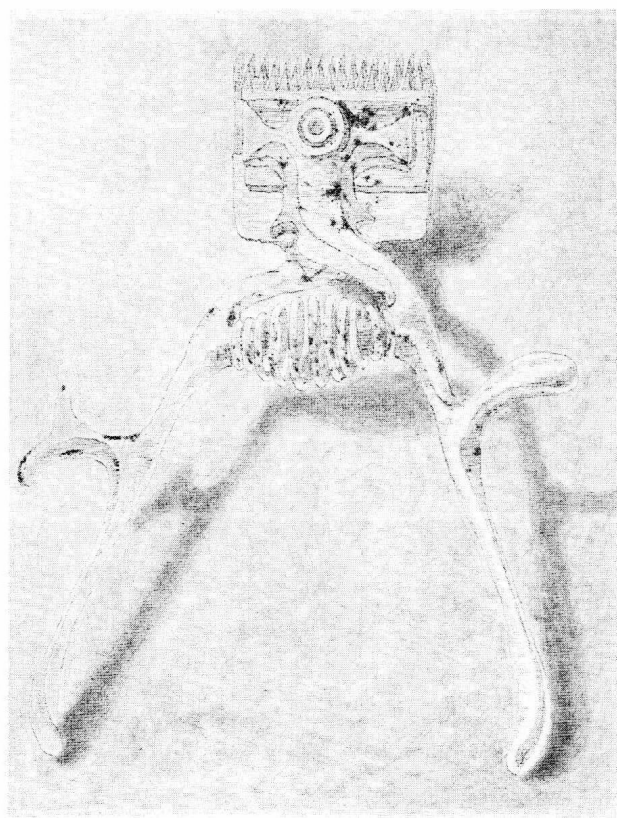
も多少の変異でもあったのだろうか。いずれにしても学校へあがるかあがらないかのこどもに捕えることが出来るはずもなく、高嶺の花であった。少年になってからは網に入ってくれることもあったが、今でもアゲハチョウの一族に出会ふと昂奮を感じる。

昨年六月頃、茶の木を見に行くという仕事があつて、わたしの父親の生地に近い、静岡の牧之原台地へ出かけたことがあつた。そこには茶業試験場があつてちょうど休みの日だったが、鉄の門の中にある花に、三匹のモンキアゲハが来ているのを見た。後翅にある特徴的な白い紋を、ゆるやかにはばたくことで見せながら、宙におだやかに浮いている姿はうつくしかった。わたしは、しばらく仕事を忘れてながめていたのだが、そのとき、二十年ほど前に見た風景をまざまざと思い出したのである。

あれは祖父の死んだ年のことだつたと思う。そうすると一九五六年のことになる。わたしは東京の大学の一年生だつた。祖父は胃癌の手遅れで手術は出来ず、当人には内緒で自宅療養をさせていた。正月に帰省したときには内出血で貧血をおこして手洗いで意識を失つたりした。

祖父は床屋の職人だつた。引退してからも小遣いかせぎのようなことをしていたが、後家になつて二人のこどもを抱えて苦勞している実の娘（つまりわたしの母）に食費をくれるでもなく、稼いだ金は自分一人のこづかいにするような男だつたので、わたしはかれに対して充分の愛情を持つことができなかった。しかし、このときはもう最後になると思つたので、多少の世話をした。

思つた通りで、その年の三月、アルバイトの仕事で家に帰れずにいると死の電報が来た。七十



二歳だった。素寒貧で葬式代も持っていなかった。そのときは悲しくはなかったが、棺を火葬場にはこぶ自動車に乗ったときは、戦争が終ったときに六人いた家族が三人になってしまったことをしみじみと感じた。さびしいと思った。

その年は夏もやはりアルバイトをしなければならなくて、夏休みも学校が休みだからといって家へ帰ってしまうわけにはいかなかった。やっと八月の終り近くなって母親一人の待っている家へ帰った。

わたしの家のあるあたりは、まわりが国鉄の職員の官舎で、二軒一棟の長屋や、ハモニカ長屋が多く、木の塀でかこんであって、よくカンナや鶏頭や夾竹桃が植えてあった。

わたしが帰りついたのは夏の物憂いような夕方だったと思う。駅から海へむかって川に沿って二キロほど歩く。小さな川には、野生にかえってしまつて、甘味もない無花果いちじくの木が生えていた。垂れ下つた枝に水嵩みづかきが増したときにつかつたためにひっかけた藁わらなどが、二つおれになつていることもあった。そしてアンツーカーの職員専用のテニスコート。

そこをまがつてわたしは目をみはつた。木の塀から大きくこぼれだして咲き誇っている夾竹桃の赤い花々に、カラスアゲハやクロアゲハなどのくろい翅はねのアゲハたちが群れているのだった。

それも五匹や六匹ではなかった。二十四匹は充分いたと思う。かれらはゆつくりとはばたきながら、花から花へと移り、長い巻きひげをのばして吸蜜を楽しんでいるのだった。

わたしはしばらく立ちどまつてかれらをながめていた。近くに立っているのにかれらはまった

くわたしのことを気になけなかつた。わたしはわたしで現実感がなかつた。現実にあるものとしては美しすぎた。

そのわたしの心を打つことがあつた。それは、かれらがどの一匹を見ても無傷ではないということだつた。アゲハの翅は、前面には翅を支え、風を切つて飛ぶために丈夫な筋金がいっているけれども、うしろ側は弱くなっている。一夏の大半をすごした晩夏の夕方のかれらの翅は痛んでいた。尾状突起などなくなつてしまっているものもあるし、破れかけて、ちょうど浮浪者がそうであるように破れ目をびらびらさせているのもあつた。しかし、蝶の方にしてみれば、この程度の破れかたなら平気で飛ぶのである。

その木をはなれて歩いた。次の夾竹桃の花にも同じように疲れたくろい翅のアゲハたちが、群れて、痛んだ翅を震わせて吸蜜していた。その次の木もそうだった。かれらは赤い光に包まれて夢のように舞い、あそんでいた。

わたしは茫然としてかれらのあいだを歩き家へむかつた。だまって玄関をあけると、うすぐらくて、すりへつた下駄がそろえてたてかけてあるのがぼんやり見えた。祖父の下駄だった。家の中をうかがつた。一人の人間の気配があり、わたしの帰つて来たのを知つた母親のひそやかな足音が近づいてきた。

(絵・バリカン)

夜のシンジュサン

去年の初夏、まだ夜などは肌寒い草津に一週間ほど仕事でいたことがあった。夜になると庭に、眼にしみ入るような透明な青い光がともった。これは、誘蛾燈にちがいない。そう思っておばさんに訊いてみるとやはりそうだった。

「そばに行くと、ポー、と燃えてしまうんですよ。かわいそうみたい」
おばさんがいった。

「え」

わたしは思わず訊きかえした。今はそんなになっているのか。

下駄をつっかけて庭へ出、下に立った。毎日、雨ばかり降って気温が低いせいか、ほとんど虫は来ていなかった。五分ほどたって、首がだるくなってきた頃、ランプのそばでチカッ、と赤い火が光ったように見えた。一匹、何かがとびこんだらしかった。

おそらくランプの周囲にヒーターの網のようなものがあった、辿りつく前に罠に陥ちて燃えて

しまうのだろう。

翌朝起きて下を見ると、小さな蛾の翅^はがちらばっていた。いつからこんなことになったのだろうか。

しばらく誘蛾燈のようなものを見ないでくらしていたのだ、ということに思い当たった。いや、見ていたのかもしれないけれども、それに注意を払ったり、関心を持ったりする余裕のない日々が続いていたのだと思う。だからわたしの知っている誘蛾燈の記憶というと一九五〇年——朝鮮戦争のはじまった年の夏までもどってしまふ。

そのころ、わたしは中学生で、静岡市の郊外にあるマッサ―ジ師のもとに、わるい左足をなおしてもらうために通っていた。夜、その人の家を出ると、あたりは一面、まっくらな水田で、あちこちで、あの眼にしみ入るように青い誘蛾燈が輝いていた。

誘蛾燈は水田にひきこまれた電燈線を使っていたようだった。細長い螢光管ランプは副木に沿って縦に立てられていて、その下には、大きなブリキを張った木の皿がおいてあり、水が張られていた。水には油膜が浮いていた。誘蛾燈に誘われて来た昆虫たちは、ぶつかって下へ落ち、油まみれになって死んでしまうのである。

その水盤の上を幾度かのぞいた。ニカメイガやツマグロヨコバイ、あるいはウンカ、といった稲の害虫がいっぱい水に落ちていた。いや、そればかりではなかった。死んで硬くなっているクワガタがいた。カナブンがいた。ゲンゴロウがいた。

ある晩、のぞきこむと、大きな蝶がおちているのに出会った。アゲハくらいある蝶だった。まだ生きていた。輝いているのに暗い感じのする螢光ランプ特有の光の下の水面に両方の翅をつけてばたばたさせていた。誘蛾燈の光では翅の色までは判らなかったが、見なれない模様だった。立派な蝶がこんなところで油まみれになっている。わたしは欲しくなって手を伸ばしてつかまえ、ノートを破った三角紙にはさんで鞆の中に入れた。昂奮していた。いったい何という蝶だろう。ふさぎこみがちなわたしの心の中で、蝶は燐光を放ってはばたいていた。

足の方は、はかばかしくなかった。四歳のときにかかった小児マヒの後遺症なのだが、どのような医学も見放しているものだった。理科の教師が、細長い顎をつき出すようにして「まだ可能性はある。二十五歳までに治療法が発見されればよくなるからな。希望を捨てるなよ」とよく激励してくれたのをうれしくおぼえている。しかし当人は信じていなかった。だから町のマッサージュ師に今さら期待などしていなかった。微かに足指が動くようになったのには一寸おどろき、かすかな希望を抱いたが、それ以上よくなるはずもなかったし、また、なりはしなかった。

そんな日々の終りの頃、もう行くのを止めようと決心していた頃だった。

友だちに図鑑を借りてしらべた。蝶ではなかった。シンジュサンという蛾だった。胴は太かったがみじかく、翅は大きかった。鳶色で白い波形の線が前翅後翅をつらぬいて走っていた。その内側にオレンジで片側をふちどられた半月形の白い模様が前翅後翅にひとつずつついていた。前翅の先には小さな眼状紋の痕跡のようなものがひとつあった。